

# 〔講演要旨〕 天正地震(1586年)時の岐阜県郡上市高鷲町における 大規模山体崩壊について

坂部和夫

## §1. はじめに

天正13年11月29日(1586.1.18)に天正地震が起こった。この地震により、郡上市高鷲町の西洞付近で大規模山体崩壊があり、多くの被害があったとされている。一方、高鷲町より南では、ほとんど被害がなかったとされている。

江戸時代の史料『白川年代記(益戸本)』には、「十一月廿九日天地震動裂ルカ如ク、(中略)西洞ノ釜ヶ洞、赤崩同時ニ山脱(ヌケ)シテ跡形ナシ。」と書かれている。この記載を再検討し、西洞付近での実態を明らかにしたい。

## §2. 高鷲町の西洞付近における大規模山体崩壊の再検討

### 2.1 史料の比較検討

江戸時代の史料『白川年代記(益戸本)』『白川年代記(三島本)』『白川奇談』『濃北一覽』と高鷲村史

### 2.2 被災地と想定される地域の現地調査

高鷲町の西洞付近に、鮮新世後期の湖成堆積物である阿多岐層が分布する。阿多岐層は白亜紀後期の白鳥流紋岩を不整合に覆い、烏帽子岳・鷲ヶ岳・大日ヶ岳などの第四紀火山岩類に覆われる。

西洞の釜ヶ洞には、蛭ヶ野高原の南端標高 800m～890m 付近に、阿多岐層と第四紀火山岩類からなる崩壊地がある。周辺には、阿多岐層の砂岩からなる流れ山がある。また、数多くの第四紀火山岩類の巨礫～大岩塊が散在する。

また、南隣西洞の折立には、崩壊地形が広く見られる。周辺には、阿多岐層の砂岩からなる流れ山がある。また、吠谷(長良川源流)右岸の標高 710m～730m 付近には、右岸側からの崩落堆があり、数多くの第四紀火山岩類の巨礫が散在する。

### 2.3 被災地と想定される地域の地元の伝承

「折立長者の白馬」天正13年11月29日夜に、折立長者弥左衛門は、寝苦しくて家の前に出た。すると、愛馬「しろ」がはるか向こうを駆けているのが見える。弥左衛門は不思議に思って見ていると、「しろ」は長者所有の田畑や草場などの外側に沿っ

て駆けている。「しろ」はさらに西にまわり吠谷を越え西の山に差し掛る辺りは、もう空を飛んでいた。ちょうど弥左衛門所有の土地を一周した。一まわりすると、「しろ」は西方大日ヶ岳の頂上指して雲に隠れてしまった。弥左衛門は夢かと家に入って厩を見ると、「あお(黒馬)」だけが佇んでいた。その晩の亥子の刻天正地震が起こって、長者の家や田畑は瞬間に崩れ潰れてしまった。それは丁度「しろ」が一周した範囲の土地であったという。「あお」は西の吠谷に押し流され、濁水に吞まれて死んでしまった。今もその淵を「馬の巻」という。

また、西洞の中村 梶田助右衛門氏によると、天正地震時吠谷は、右岸側が崩壊して堰き止められた。今もここには数多くの巨礫が散在する。そこは、「馬の巻」の下流約 50m に位置する。

## §3. おわりに

江戸時代の資料と地元の伝承から想定される天正地震(1586年)時の郡上市高鷲町の西洞付近特に折立での崩壊状況は、現地調査とよく調和し、天正地震時間違いなく被害があったことが分かった。一方、高鷲町より南では、ほとんど被害がなかったとされている。この違いの大きな理由は、前者が蛭ヶ野高原の南端における侵食最前線に位置するからと考えられる。そこは長良川源流域である。